

金錢に對する觀念

佐治實然

日本人は兎角に金錢を卑むの風があります。人間が此の世の中に生存して獨立自營し、人に迷惑を掛けず自分は自分で超然として社會の上に立ち高貴にも屈せず社會にも諂はずして、自分の本分を盡して行かうとするには金錢を大切に、相當の資産を持つて世に生存すると云ふことが必要であります。人は其技倆に依つて何處迄でも發達をなし、大臣となる人もあります。それを動物に譬へれば、象の如く虎の如き人でありませう、併しまだ私共の如きものもありまして、動物で申せば驢鼠のやうなものでありませう、併し驢鼠でも驢鼠丈の本文を盡せばそれで足るので、象や虎の處へ行つて頭を垂れて食を求めるとも致しません、私は元來個人としては下僕に至るまで相當の敬意を拂ひますが、社會であるとか國家で

あるとか云ふものは、餘り立派なものと思ふて居りませんから、社會の人ではあります。社會より超然として身を處理する覺悟であります。扱て金錢を正當に用ゐる人と否とに依つて、人格に於ても甚だ異なつて參ります。友人のうちに二種の人があります。一は金錢を浪費する人、一は金錢を大切に扱ふ人です。金錢を浪費する人の家に行つて見ますと、甚だ待遇が宜しくて、客が行くとそれ酒を出せ、鮓を取れ、蕎麥を取れと云ふ風であります。扱てこの友人は何時か人に金を借して呉れいと頼みに來る友人であります。能く調べて見ると甲の彼にも乙の友にも借りて居ると云ふ有様であります。これに反して金錢を大切にする人の家に行きますと、濫茶を一抔出す丈けて、客に對しては甚だ不待遇の様であります。何年交際しても金の無心などを申出たことなく、正實の人として永く交際が出来る人です。右二種の人は何れが果して立派なる

人間でありませうか。

私は近頃甚だ面白ひ婦人を見ました、其の婦人は數年前に私の近所に居つた人でありますが、三十歳を越して居るに琴の稽古を始め出して、師匠を家に招いて習ひ始めました、私は其時思ふた、これは甚だ誤つて居る、未だ甚だ案じられたものであると思ふて居りましたが、數日前不圖破れたる小さな家から、貧に寒れた婦人が顔を出して居るのを能く見ますと、それは前の婦人でありまして、私の豫想の適中して居つたのを覺つたのであります、人には各々其分に應じ、其時時に處して行くべき仕方があるので、其分を超過してまですす事柄は、多くは外見を飾ることになります。近頃家計を整へるについて、毎月の豫算を作つてこれに依つて處理して行くとか云ふ家庭があるさうであります、私はそれは間違ひであると思ひます、一萬圓とか二萬圓とか云ふ一ケ年の支出がある大家には豫算表も必用かも知りませぬが百圓

取りや五十圓取りの貧民生活を營む家庭には不要であると思ひます、私は片端より使ふて行くがよい、豫算に振別ける程の餘地がないと云ふのであります、片端より使ふて行くのは勝手に使へと云ふ意味ではありません、必用止を得ぬものに片端より使用して行くので、一ヶ月を締め上げた處で給料丈けで不足の恐れがあれば、不必用なものから減じて行くのであります、食費で減ずることが出來ねば、家賃とか衣服とか交際費とか云ふもので減じて行き、大なる勇氣と決心とを以つて不必用と認むる部分は斷然と減じて行かねばなりません、人目が何うとか、社會が何うとか云ふことは眼中になくともよいのであります、其の決心と勇氣が無くては何時まで立つても獨立は出來ません、主人とか主婦とかの小使費と云ふものは不必用であります、私は數年間小使錢と云ふものを使ふたことがあります、交際上より宴會に臨むことがあれば、それは小使では無い交際費であ

る、また家庭の人々を連れて料理でも食ふとすれば、それは慰安費と云ふもので小使費ではない、つまり金銭は使用の途の正確に知れぬものには、一文たりとも出さず可き性質のものでないと云ふことを常に考へて居らねばなりません、今の若き人は學士にでもなつて、月給の五十圓位の貰ふと人間並になつたかの如く考へ、それ妻を迎へる家を値る、下女を置くといふ風であるが、五十圓ばかりの東京生活は、貧民たるを免れぬ生活でありませぬから、これから人の妻君となるものは、豫め貧民生活を盡すの考へがなくてはなりません、貧民は何んなるものを食つて生きて居るかを研究するが宜しい、魚屋などでも品質を上中下の三通りに分類をして居り、八百屋でもさうであるから、食物を買ふにも充分の注意を拂つて経済的に遣つて行かぬと生計を營むことが出来ないであります。要するに世に處して往くことは、餘程六ヶ敷いことでありませぬが、其秘訣は心を鞏固に持つと云ふ

ことでありませぬ、昔し擊劍の奧儀を傳へる爲めに巻物を貰ふた何んな奧儀があるかと思ふて開いて見たら「心」と云ふ一字があつたと云ふ話がありませぬが、それと同じく金銭に對する觀念も只心掛け次第にあり、不必要なる費用は決して使用せぬといふことさへ確かであれば、金銭を貯へることの如きは容易に行はれることでありませぬ。(新婦人)

▲歐洲に於ける馬肉需要増加 馬肉の需要は近來歐洲諸國に於ても次第に増加する傾向ありて西班牙人の如きは從來宗教上の意味より全く馬肉を食せざりしが近來之を食するもの少なからざるに至れり最も多く馬肉を消費するは佛國民にして壤地利之に次ぎ同國首府維也納に於る千八百九十四年の屠馬數は一万八千二百〇九頭なり獨逸伯林にて千八百四十七年の屠馬數僅に三千頭なりしもの千九百二年には一万二千七百〇三頭に増加し普魯西にては千九百二年に八万五千八百二十頭の馬を屠殺したる由なり